

平成23年度オープンレクチャー（調査・研究成果の公開）（④企10-11-1/5）

第45回オープンレクチャー「モノ／イメージとの対話」

企画情報部では、研究成果を広く公表するために公開学術講座を毎年秋に開催しており、本年で45回目を迎えた。昨年度同様、今年度も金曜日と土曜日の午後、2日間連続で開講し、聴講者の便宜を図るように努めた。今年より「モノ／イメージとの対話」とのテーマを掲げることとした。個々の講演内容は以下の通りであるが、今回は、各日の講演にあたり下記のようなテーマを設け、これに関連した視点、あるいは問題の提起を試みた。なお、この講座は、上野の山文化ゾーン連絡協議会が主催して毎年秋に開く「上野の山文化ゾーンフェスティバル」の講演会シリーズのプログラムとしても企画されている。

今回は2日間でのべ236人の参加があり、参加者にアンケートを実施したところ、188人から回答を得た（回収率：79.7%）。結果は、「たいへん満足した」104人、「おおむね満足した」64人、「普通だった」12人、「不満が残った」0人、回答者の89.4%が満足感を得たことがわかった。

第1日：2011（平成23）年11月11日（金）1：30～4：30、東京文化財研究所セミナー室

「日本美術史における様式の複線性―様式の選択と編集―」

・皿井舞（東京文化財研究所）「平安時代前期から後期へ―六波羅蜜寺十一面観音像にみる様式―」

京都・六波羅蜜寺十一面観音像は、十世紀半ば、平安時代前期から後期へと移り変わる過渡期につくられた像である。本像の造像にあたって、いかに過去の作品を参照しつつ、次代につながるかたちを獲得したか、制作背景を再検討しつつ考察した。

・高岸輝（東京工業大学大学院）「鎌倉時代から室町時代へ―中世やまと絵様式の源流と再生―」

室町時代のやまと絵、特に絵巻を通覧すると、流派や絵師の枠を超えた複数の様式が並存していることに気づく。それらは、平安末期から鎌倉期のやまと絵を範として仰ぎつつも、リバイバルの方向性は作例によって異なる。再生の傾向にあらわれる差異に注目し、比較することによって、作品の同時代における位置づけや制作の背景を読み解く。

第2日：2011（平成23）年11月12日（土）1：30～4：30、東京文化財研究所セミナー室

「古美術のコンセプト」

・綿田稔（東京文化財研究所）「室町漢画の基盤―周文と雪舟の場合―」

雪舟筆「秋冬山水図」（東京国立博物館蔵）のうち冬景図は、「斬新」と評しうる画面構成で知られている。ここでは冬景図の「謎」について、雪舟と雪舟の時代の常識的コンセプトに照らした解釈を試みる。また同様のコンセプトを雪舟の師である周文にも適用し、今まで定まらなかった周文の基準作について、その候補を挙げてみた。

・佐々木守俊（町田市立国際版画美術館）「平安～鎌倉時代の印仏―スタンプのほとけ―」

スタンプ式の簡易な仏画である印仏は、その素朴な味わいが愛され、売買の対象ともされてきた。しかし、本来はしばしば仏像の内部空間に納入されて重要な役割を演じ、大規模な法会の場においても使用される、特徴ある尊像だった。そうした制作環境を再現し、「版画」としての評価とは異なった視点から、印仏の歴史的意義を考察した。